

高等学校

平成 13 年 度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教職員研修センター

目 次

**研究主題 問題解決能力の育成を目指した総合的な学習の時間
－「進路学習」及び「国際理解」を事例として－**

I	研究主題の設定について	1
II	進路学習（第1分科会）	
1.	研究の趣旨	1
2.	高校生の進路意識についての実態調査	2
3.	年間指導計画の例	3
4.	第1学年第2学期における授業展開の事例	7
5.	第2学年第3学期における授業展開の事例	10
6.	まとめと今後の課題	13
III	国際理解（第2分科会）	
1.	研究の趣旨	14
2.	年間指導計画の例	14
3.	第1学年第1学期における授業展開の事例	19
4.	第2学年第1学期における授業展開の事例	22
5.	生徒の主体的な学習を促すための留意点	24
6.	まとめと今後の課題	25

平成13年度 教育研究員名簿

◎世話人 ○副世話人

	学区	学校名	氏名
1	1	都立八潮高等学校	黒羽 博行
2	2	都立広尾高等学校	氏原 健二
3	3	都立大泉北高等学校	福田 誠司
4	4	都立竹早高等学校	工藤 尚子
5	4	都立向丘高等学校	澤木 春樹
6	5	都立忍岡高等学校	山浦 敏之
7	5	都立晴海総合高等学校	末沢 靖子
8	5	都立台東商業高等学校	横田 昇
9	6	都立小松川高等学校	阿部 隆文
10	6	都立向島商業高等学校	本間 透修
11	6	都立江東商業高等学校	斉藤 直子
12	8	都立北多摩高等学校	下田 賢明
13	8	都立東大和高等学校	○ 梅原 章司
14	8	都立秋留台高等学校	渡辺 和己
15	9	都立東村山西高等学校	◎ 小林 智子
16	13	都立八丈高等学校	佐藤 守

担当 東京都教職員研修センター統括指導主事 上原 徹

I 研究主題の設定について

平成11年3月29日に新しい高等学校学習指導要領が告示された。今回の改訂では、国際化、情報化の進展などによる急激な社会の変化や現代の高校生の抱える課題を踏まえ、「ゆとり」の中で、自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、問題を解決する資質や能力、豊かな人間性などの「生きる力」の育成が基本的なねらいとされている。

生きる力は全人的な力であり、その育成を図るためには、教科等間の連携・協力を一層密接に図った、また、教科等の枠を越えた横断的・総合的な教育活動の推進が強く求められる。また、新学習指導要領では、総合的な学習の時間が新たに設置されるとともに、その学習テーマとして、特に全ての教科等にかかわる内容をもった、国際化、情報化などの現代社会が抱える課題、また、自己の在り方生き方や進路について考察する学習などが例示された。

研究主題の設定に当たっては、こうした新学習指導要領や総合的な学習の時間のねらいを踏まえるとともに、各学校の生徒の様々な実態を出し合い話し合った。例会の話し合いで出された意見を全て述べることはできないが、生徒の学習の実態としては、「学習が受け身で、覚えることは得意だが、自ら考え、判断し、自分なりの考え方をもち、それを表現する力が十分に育っていない生徒が多い。」、「一つの正解を求めることはできても、多角的な物の見方や考え方が十分でない。」などの意見が多く出された。また、現代の高校生の課題として、「いわゆるフリーターが増加しており、進路に関する生徒の意識が以前とはかなり変化している。」、「生徒の就職や職業に対する目的意識が希薄化している。これは、自己の進路を真剣に考えようとせず、考える機会も少ないということがある。」、「豊かな人間性の育成には、人間としての在り方生き方を考えさせることが大切であり、特に職業観や勤労観の育成を図ることが重要である。」などの意見が多く出された。さらに、現代社会が抱える課題についての学習では、「近年、東京では、急速に人の国際化が進展しており、国際理解教育の重要性がますます高まっている。」、「生徒は国際化についての関心はあるものの、国際社会の今日の状況や異文化についての知識が不十分である。」など、国際理解教育についての課題が、特に多く出された。

こうした話し合いの結果を踏まえ、今年度は、進路学習と国際理解を研究主題として取り上げるとともに、研究を進めるに当たって、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する能力を育成する指導法の工夫を行うこととした。

一方、高等学校においては、平成15年度から新学習指導要領が実施されるため、総合的な学習の時間を実施している学校もまだ少ない。また、総合的な学習の時間についての実践資料もかなり少ない。そこで、平成15年度からの授業実践に向けて、当面、各学校で必要とされる年間指導計画及びそれに基づく実践事例を作成することを研究内容とした。

II 進路学習（第1分科会）

1 研究の趣旨

現代の高校生は、卒業後、進学先や就職先等で生き生きと学び、働いているのかということ必ずしも、そうは言えない現状がある。

大学では、入学後、学生生活に目標を持てなくなり、長期の欠席をしたり、その結果としての留年などが増加していると言われている。それは、大学に進学することだけを目標に勉

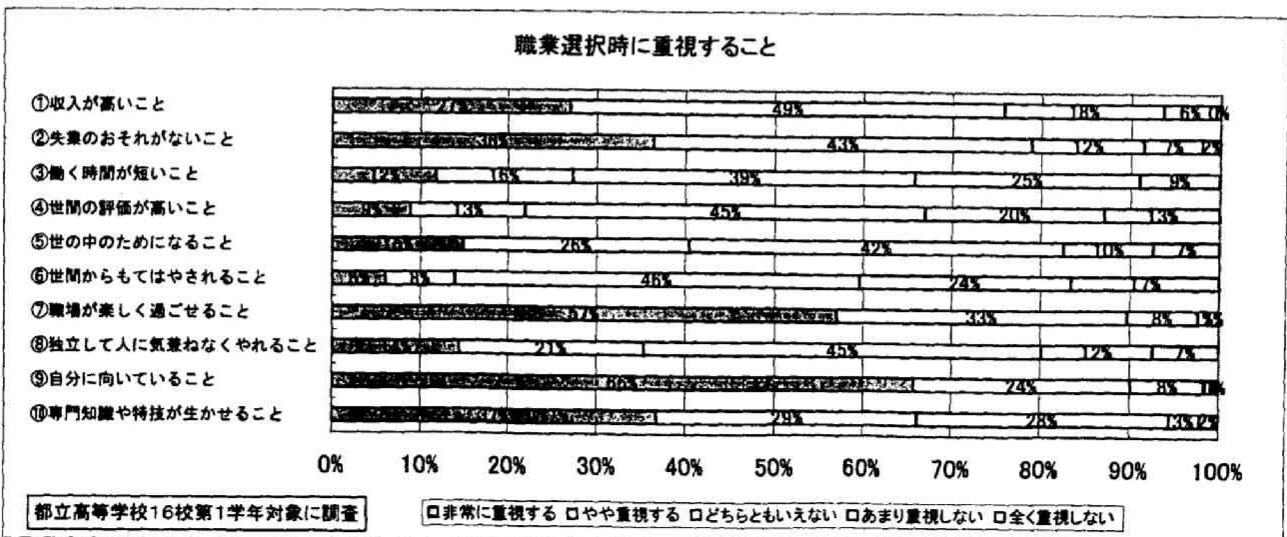
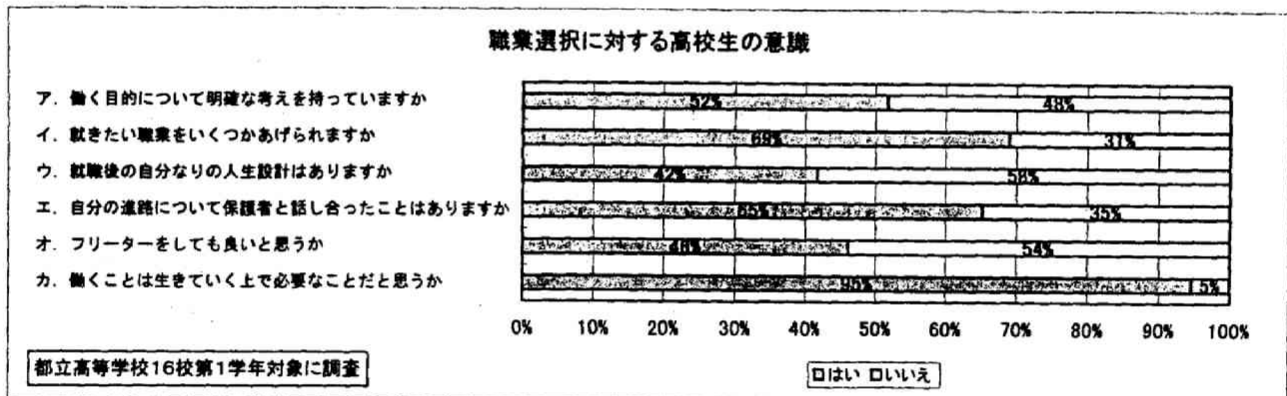
強し、合格可能性のみを重視して、大学や学部を選択するため、入学後、生活に目標を見いだすことができなくなったためとも言われている。

また、職場では、働くことの意義や役割、職業を通じて自己を生かすことの大切さなどを十分に理解しないままに就職し、離・転職する高校卒業者が増加しており、近年、高校卒業就職者の約半数が3年以内に離職している。また、高校卒業後、進学も就職もしようとせず、いわゆるフリーターを志向する生徒の増加も指摘されている。

こうした高校生の進路の課題は、現代の社会や経済状況から生まれてきた側面もある。しかし、その一方で、生徒の職業観や勤労観が未成熟であるということなどの背景もあり、このことは、学校教育における進路指導にとって見過ごすことのできない重要な課題でもある。そこで、本研究では、生徒が自らの在り方生き方を考えるとともに、望ましい職業観や勤労観を確立することを目指し、各学年における年間指導計画、実践事例を作成することとした。

2 高校生の進路意識についての実態調査

進路学習の年間指導計画、実践事例を作成するに当たっては、現代の高校生の進路意識の実態を踏まえることが重要であり、そこで、高校生の進路意識についてのアンケート調査を実施することとした。調査は、現代の高校生が人生において働くことの意味をどのように考えているか、また、どのような判断基準で職業選択を考えているかについて知ることをねらいとした。



調査結果では、「働くことは生きていく上で必要なことと思うか」という質問については、

95%という非常に多くの生徒が「はい」と答えた一方で、「働くことについて明確な考えを持っていますか」という質問については52%しか、「就職後の自分なりの生活設計はありますか」という質問については42%しか、「はい」と答えなかった。また、「フリーターをしてもよいと思う」と答えた生徒が46%いた。調査結果を通して、働くことは必要であると思っているものの、自己の生き方とのかかわりで、働くことの意義を必ずしも見いだせていないことが伺える。

また、職業選択において重視することとしては、「自分に向いていること」を「非常に重視する」「やや重視する」と答えた生徒が合わせて90%となっている。しかし、これらの生徒について、聞き取りをしてみると、自己の個性・適性を踏まえて、具体的にどのような職業が自分に向いているかということについて、明確に答えられる生徒は余りいなかった。

3 年間指導計画の例

こうした調査結果を踏まえ、年間指導計画の作成に当たっては、自己についての理解を深めるとともに、望ましい職業観や勤労観を身に付けることにより、主体的に進路を選択し、決定する能力の育成をねらいとした。また、主体的に進路を選択・決定する能力は実践的な能力であり、その育成には、3年間の指導の積み重ねが必要であるとともに、自己の抱える課題を意欲的に解決する態度や能力の育成が求められる。そこで、年間指導計画の作成に当たっては、生徒の進路に関する発達段階を踏まえ、各学年における指導のねらいを段階的に設定するとともに、問題解決的な学習や体験的な学習などを工夫することとした。

(1) 第1学年の年間指導計画の例

第1学年の多くの生徒の実態を見ると、社会にはどんな職業があり、その職業がどんな内容であるかということをも十分に理解していない。また、自己の個性や適性についての理解も十分深まっておらず、進学するか就職するかということについても漠然としている。そこで、第1学年では、年間指導計画のねらいを「自己理解の深化と進路視野の拡大」とした。第1学期は、社会人講話等により、職業が果たす意義や役割について認識を深めていくこととした。第2学期は、自己探求ワークショップ等により、自己の職業についての興味・関心の具体的な内容を理解するとともに、職業研究や大学・短大・専門学校の研究などを通して、具体的な進路先を考える契機をつくることとした。第3学期は、自分史や未来史を書き、自己の興味・関心や個性・特性などについて理解を深めるとともに、将来の生活設計を考え、その実現のために、今、何をすべきか考えることとした。なお、年間1単位(35単位時間)とし、授業の実施は、週1時間を基本とするが、職場見学、ボランティア活動などの体験的な学習については集中的に時間を確保する。

	学習項目	具体的な展開内容
1	オリエンテーション	年間学習計画・授業方針を説明する。進路個人ノートを配付する。進路についてアンケート調査を行う。
	作文	テーマは「高校生活への抱負」など。
	進路適性検査	適性検査を実施し、結果の見方を説明する。

学 期	社会人講話	社会人を講師として、仕事の実際について話を聞く。 講演者の職業について事前に学習し、話を聞き、考えたことや感想を「講演者への手紙」としてまとめる。
	グループ ディスカッション	テーマは「働く目的」など。 アンケートなどによりどのような基準で職業を選ぶのか意見を出し合う。意見の異なる者でグループを作り、討議する。 その後、家族など身近な人の意見を聞き、自分の考えの変化をレポートにまとめる。
	体験的な学習の ガイダンス	職場見学やボランティア活動などの体験的な学習の意義、コースごとの日程・実施方法・留意点を説明する。
	体験的な学習の 希望調査	コースの希望調査を行い、調整する。
	体験的な学習準備	コースごとに事前学習および事前準備をする。
夏	体験的な学習	地域にある商店、企業などでの職場見学、老人ホームなどでのボランティア活動を行う。
学 期	2 体験的な学習の まとめ及び発表	コースごとに体験した内容や感想をまとめ、文化祭で展示・発表する。
	自己探求 ワークショップ	自己発見ワークを実施する。 進路探索ワークを実施する。
	職業研究	自己発見ワーク及び進路探索ワークを参考に興味・関心のある職業について調査・研究する。内容をレポートにまとめる。
	大学・専門学校の 研究	職業研究の結果を参考に、興味・関心のある上級学校について調査・研究する。内容をレポートにまとめる。
	作文	テーマは「将来への希望」など。
3 学 期	自分史、未来史 の作成	自分史、未来史を書く意義、作成方法を説明する。現在に至るまで、自分のやりたかったことや個性、特技などについて自分史を書く。将来の職業生活についての希望を含め未来史を書く。

(2) 第2学年の年間指導計画の例

第2学年は、自己の進路について、少しずつ真剣に、また、具体的に考え始める時期である。働くことの意義をしっかりと理解するとともに、自己の進路についての考えを整理し、より具体的、現実的に進路を考えさせることが重要である。そこで、第2学年では、年間指導計画のねらいを「希望する進路先との関係での自己の適性の理解」とした。第1・2学期は、生徒の現在の興味・関心や生き甲斐に基づき、将来進みたい大学や短大、専門学校、将来就きたい職業を体験し、希望する進路先についての自己の適性を考えるとともに、希望実現の意欲を高め、努力する契機をつくることとした。第3学期は、どの進路を選択しても、しっかりした職業観や勤労観を確立することが重要であ

り、若い世代に増加するフリーターをテーマとして取り上げ、ディベートを行い、職業観や勤労観について考えることとした。なお、年間1単位(35単位時間)とし、授業の実施は、週1時間を基本とするが、大学・短大・専門学校、職場等の体験的な学習については集中的に時間を確保する。

	学習項目	具体的な展開内容
1 学 期	オリエンテーション	年度の授業方針・実施計画を説明する。進路個人ノートを配付する。
	進路希望・適性の確認	第2学年における進路希望調査・進路適性検査を行う。
	進路ガイダンス	大学・短大・専門学校・就職について説明会を行う。
	グループ学習① (ガイダンス)	上記ガイダンスを基に、グループ別の体験的な学習の日程・実施方法・留意点等を説明する。
	グループ学習② (計画・立案)	進路希望別にグループ分けを行い、各グループ毎に、夏休み期間中の体験的な学習(大学オープンキャンパス・専門学校訪問・就業体験)の計画を立てる。
	グループ学習③ (課題設定)	グループ別に、体験先についての調査内容(例 大学：大学の沿革・学部や学科の特色・教授陣・研究内容・取得資格・就職先等、就業体験：会社の沿革・規模・特色等)を考える。
夏 学 期	グループ学習④ (報告・検討)	各グループ毎に課題設定し、調査・研究方法等を提出し、報告する。質疑応答時間を設け、クラス全員で検討する。
	グループ学習⑤	体験的な学習への参加の最終確認を行う。
	体験的な学習①	大学・短大・専門学校オープンキャンパスへの参加、就業体験を行う。
	体験的な学習② (まとめ)	夏休みに体験した大学、専門学校、職場のレポートを作成し、発表の準備をする。
	体験的な学習③ (大学模擬授業等)	大学模擬授業体験、社会人卒業生による講演・座談会を行う。
	体験的な学習④ (発表準備)	上記の体験レポートを作成し、発表の準備をする。
2 学 期	体験的な学習⑤ (発表会)	1グループ10分程度の発表を行い、質疑応答を行う。
	体験的な学習⑥ (反省とまとめ)	体験的な学習の報告書を作成し、提出する。
	職業観・勤労観 の育成	体験的な学習を通して、職業や勤労について考える。 個人別レポートを提出する。
	ディベートに ついての説明①	フリーターを論題としたディベートの実施について、留意点等を説明する。
	ディベート準備②	ディベートの方法の説明と学習目標に基づいた論題「若い世代

3 学 期		に増加するフリーター」を決定する。
	ディベート準備③	各グループに分かれ、フリーター賛成派と反対派を決め、各グループ内の役割分担を決める。資料収集・分析方法を説明する。
	ディベート準備④	各グループ毎に話し合い、フリーターに関する資料収集を行う。
	ディベート準備⑤	グループ毎に資料を確認し、検討する。草稿を執筆し、台本の読み合わせを行う。
	ディベート準備⑥	「若い世代に増加するフリーター」を論題にディベートを実施する。
	ディベートの反省 ⑦	フリーターの問題点について考えるなど、ディベートの反省を行う。
	ディベートの まとめ ⑧	ディベートによる授業のまとめとして、職業の意義と役割について意見交換を行う。

(3) 第3学年の年間指導計画の例

第3学年は具体的な進路先を決定する時期である。希望する進路を実現する意志を固め、主体的に進路の選択・決定に取り組むことが求められ、年間指導計画のねらいを「未来を拓くー自己実現に向けてー」とした。このねらいを踏まえ、1年間を通して、自己の進路や生き方をテーマとした卒業論文を作成・発表し、自己の進路や生き方についての考えを整理するとともに、問題解決能力や表現力などの能力の育成を図ることとした。第1・2学期の卒業論文の作成に当たっては、インターネットをはじめとした各種メディアを利用し、情報を主体的に収集・活用することとした。第3学期は、作成した論文を発表し、生き方や将来就きたい職業は人によって異なっていることに気付かせ、多様な人生観、職業観があることを理解するとともに、友人や保護者、地域社会の人々などからのアドバイスを受けることを通して、改めて、自己の進路について考えを深めることとした。なお、年間1単位（35単位時間）とし、授業の実施は、週1時間を基本とする。

	学習項目	具体的な展開内容
1 学 期	オリエンテーション	学習目標・年間学習計画を説明する。論文作成の基本的マニュアルを配付し、学習方法の概要を説明する。
	アンケート調査 ・個別面談	生徒が自己の興味・関心の所在を踏まえ、進路や生き方に関するテーマを設定し、同じ内容のテーマ毎にグループに分かれることを説明する。
	テーマ及び グループの決定	テーマ別にグループを決定する。論文テーマの検討など、今後の作成計画のアウトラインを討議する。
	論文作成Ⅰ (研究テーマへの アプローチ)	①論文の基本構想を研究計画書にまとめる。 ②担当教員の助言のもと、論文作成の基本構想をグループ内で発表し、意見交換する。 ③グループ内での意見交換を踏まえ、論文のテーマや基本構想を再検討し、決定する。

	論文作成Ⅱ (ワーキング)	論文作成に向けて、資料の収集・調査活動を実施する。 〔図書館や各種資料館、インターネットなどの積極的活用、自治体や大学、企業などの訪問、社会人などへのインタビュー、アンケートなどにより調査する。〕
夏	執筆作業Ⅰ	1学期の準備作業に基づき論文の草稿を執筆する。
2 学 期	中間報告	グループ内で、これまでの論文執筆の進捗状況を発表する。必要に応じて修正や再調査、資料補充などを行う。また、完成に向けて課題の検討を行う。
	執筆作業Ⅱ	中間報告を踏まえ、原稿の執筆、論文の完成を目指す。
	グループ内発表	①グループ内で完成原稿の読み合わせを行う。 ②完成原稿について、教員・生徒による討議を行い、相互に評価する。 ③卒業論文発表会に向け、グループ代表論文の選考を行う。
	卒業論文発表会準備	卒業論文発表会に向け、発表用レポート及びプレゼンテーション用資料を作成する。
	卒業論文集の作成	各自の完成原稿をまとめ、卒業論文集の作成作業を行う。
3 学 期	卒業論文発表会	研究成果の発表は、保護者や地域社会の人々などにも公開する。また、保護者や地域社会の人々の意見などの外部評価も取り入れる。
	評価とまとめ	1年間のまとめと自己評価を行う。

4 第1学年第2学期における授業展開の事例

第1学年の第2学期は、まだ、多くの生徒の進路意識は低い。第2学期は自己探求ワークショップにより、各種の職業についての興味・関心を高めるとともに、職業研究、また、職業研究に基づく大学・専門学校の研究を通して、各種の職業についての理解やその職業に就くための進学先についての理解を深めることとした。

(1) 単元設定の理由

社会・経済の変化の中、新しい産業が生まれ、多種多様な職業が存在するようになってきている。現代の高校生は、職業が多様化する中で、昔に比べて仕事というものが見えにくくなっており、その内容や目的について具体的なイメージが持てなくなっている。そうした多くの職業の中から、自己に適した職業を見つけ、生き甲斐を感じながら職業生活を送ることができるようにすることが重要である。本単元では、作業学習を工夫し、楽しく作業することを通して、積極的に自己に適した職業を考えようとする意欲を育成したい。

(2) 単元の内容

第1時 自己の適性等の理解を図るため、自己発見ワークによる作業学習を行う。

第2・3時 進路探索ワークの作業を通して、各種の職業に関する自己の興味・関心の具体的な内容を理解する。【本時】

(3) 単元のねらい

- ① 自己の適性等の理解を深めるとともに、各種の職業に対する興味・関心を高める。
- ② 各種の職業の中から、自己に適した職業の意識化を図り、希望する職業に就くための努力の大切さに気付く。

(4) 本時

① 本時のねらい

ア 職業の多種多様性について理解し、自己の生活が多種多様な職業に支えられていることに気付く。

イ 各種の職業に対して、自己の興味・関心がどこにあるかを理解するとともに、自己に適した職業を意識していく。

② 授業展開（100分）

時間	学習項目	学習内容	指導上の留意点
15分	○思いつく職業を上げる。	○各自が思いつく職業を上げ、様々な職業があることを知る。	○職業に対する偏見がないよう指導する。
20分	○各種の職業について、自己の興味・関心を知る。	○少しでも興味や関心のある職業には職業カードシートのYに、全く関心の無い職業にはNに○を付ける。 ○知らない職業については互いに相談したり、辞典などで調べる。	○その職業に就けるかどうかで判断せずに、興味・関心を基準に○を付けさせる。 ○Yが少なくなりすぎないように各職業について説明する。
45分	○職業カードシートの各職業を分類する。 ○Yの職業をグループ分けする。 ○グループ分けした職業の関係、グループ名を考える。	○職業カードシートを職業別に全て切り離し、YとNを分類する。 ○その職業に対する興味・関心の程度や適性、生き甲斐などを基準にYを3つ程度のグループに分ける。 ○グループ分けした職業の関係を考えながら、各グループ毎にワークシートに貼り付け、グループ名を書く。 ○Nは右端に貼る。	○紛失しないよう注意させる。 ○グループ分けの基準は自由に考えさせる。 ○グループ分けした職業間の関係を充分時間をかけて考えさせる。 ○各グループ名は異なった色を使って書かせる。
	○自己のキャッチフ	○各グループ名を基に、職業に	○互いに相談せず自分

20分	レーズを考える。 ○感想を書く。	ついての考えをまとめ、今の自分についてのキャッチフレーズを考える。 ○各職業についての自分自身の考え方や分かったことなど、感想を短くまとめて書く。	らしさを出させる。 ○友人の考え方を批判することのないよう指導する。
-----	-------------------------	--	---------------------------------------

③ 評価の観点

- ア 職業カードシートの作業を通して、職業についての興味・関心を高め、その多様性に気付くことができたか。
- イ 興味・関心のある職業の分類を通して、それらの職業に対する、自己の興味・関心の具体的な内容について理解できたか。
- ウ 自ら進んで意欲的に、ワークシートの作業に取り組むことができたか。

④ 授業での使用資料

ア 職業カードシート（一部抜粋）

1 作家 Y・N	28 芸術家 Y・N	55 外交官 Y・N	82 音楽教室講師 Y・N	119 トラック運転手 Y・N
2 経理事務員 Y・N	29 マンガ家 Y・N	56 商品開発部員 Y・N	83 社会福祉士 Y・N	120 月刊誌販売員 Y・N
3 スポーツインストラクター Y・N	30 航海士 Y・N	57 医療事務員 Y・N	84 薬剤師 Y・N	121 看護士 Y・N
4 商品管理係 Y・N	31 動物園飼育係 Y・N	58 秘書 Y・N	85 造園師 Y・N	122 牧場経営者 Y・N
5 アナウンサー Y・N	32 臨床検査技師 Y・N	59 研究所研究員 Y・N	86 歯科衛生士 Y・N	123 服飾販売員 Y・N
6 百貨店販売員 Y・N	33 スチュワーデス Y・N	60 ミュージシャン音楽家 Y・N	87 林業技術者 Y・N	124 出版社編集員 Y・N
7 幼稚園教員 Y・N	34 自動車整備士 Y・N	61 放送ディレクター Y・N	88 言語療法士 Y・N	125 俳優 Y・N
8 小学校教員 Y・N	35 無線通信士 Y・N	62 美容師 Y・N	89 航空管制官 Y・N	126 声優 Y・N
9 中学校教員 Y・N	36 理学療法士 Y・N	63 学芸員 Y・N	90 インテリアコーディネーター Y・N	127 飲食店経営者 Y・N
10 高校教員 Y・N	37 スーパーマーケット販売員 Y・N	64 カメラマン Y・N	91 OA機器販売員 Y・N	128 公認会計士 Y・N
11 大学教員 Y・N	38 住宅・不動産営業部員 Y・N	65 パイロット Y・N	92 自衛官 Y・N	129 タクシー運転手 Y・N
12 養護学校教員 Y・N	39 自動車販売員 Y・N	66 児童相談員 Y・N	93 保険外交員 Y・N	130 司法書士 Y・N
13 養護教諭 Y・N	40 医師 Y・N	67 警察官 Y・N	94 書道教室講師 Y・N	131 服飾デザイナー Y・N
14 保育士 Y・N	41 理容師 Y・N	68 トリマー Y・N	95 通訳 Y・N	132 電車運転士 Y・N
15 消防官 Y・N	42 弁護士 Y・N	69 歯科技工士 Y・N	96 税理士 Y・N	133 銀行員 Y・N
16 航空整備士 Y・N	43 シナリオライター Y・N	70 メイクアップアーティスト Y・N	97 カウンセラー Y・N	134 司書 Y・N
17 新聞記者 Y・N	44 調理師 Y・N	71 柔道整備師 Y・N	98 バスガイド Y・N	135 コピーライター Y・N
18 栄養士 Y・N	45 評論家 Y・N	72 ラジオ・テレビ放送技術者 Y・N	99 裁判官 Y・N	136 郵便局職員 Y・N
19 測量士 Y・N	46 不動産鑑定士 Y・N	73 獣医師 Y・N	100 農業技術者 Y・N	137 建築士 Y・N

イ 進路探索ワーク（一部抜粋）

職業を通して自己理解を深めよう

実施日 平成 年 月 日

年 組

作業の仕方

- ① Y・Nに○を付けた職業カードシートを丁寧に切り取りYとNに分けてNは右側の枠に貼る
- ② Yのカードを好きなことを基準にしてグループ分けをして各グループに名前を付ける
- ③ 各グループの関係を考えながら左の枠にグループ毎に貼っていきグループ名を記入する
- ④ グループ名を見ながら自分のキャッチフレーズ「～な自分」を考えて記入する

マイ キャッチフレーズ

いろいろな自分

①のカードの貼り付け箇所（この枠をいっぱい使って作業しよう）

⑤ 生徒の感想

- (ア) もっといろいろなことに興味を持ちたい。(イ) やりたい職業がいっぱいあって驚いた。(ウ) 職業はいっぱいあるけど、成りたいものはすごく少ないと思った。(エ) 自分の中にちゃんと職業を考えている自分があると分かった。(オ) やりたいことを発見した。(カ) 自分のやりたい仕事が見つかると思ったけど、なかなか見つからなかった。このままではだめだ。(キ) 私は人との接触をする職業が好きなことが分かった。(ク) 夢が無いことに気付いた。(ケ) 意外と夢が多くて安心した。(コ) 初めてこんな授業を受けて楽しかった。

5 第2学年第3学期における授業展開の事例

第2学年の第3学期になると、多くの生徒が自己の進路をより現実的なものとして考えるようになる一方で、最近の傾向として、職業観や勤労観が未成熟なため、やりたいことが見付からず、自己の進むべき道を見いだせない生徒が増加している。そこで、第3学期は、「若い世代に増加するフリーター」をテーマにディベートを実施し、職業の意義や役割について議論することを通して、職業観や勤労観について考えさせることとした。

(1) 単元設定の理由

2001年度の労働白書によると、フリーター人口は150万人を超え、その約47%が高等学校卒業者となっている。フリーターについては様々な考え方があり、本研究では、特に職業観や勤労観が未成熟なために、進学しようともせず、定職に就こうともしない若者をフリーターとして考えた。今日、生徒の中には、特定の職業に就いて働くことに

対して、辛いもの、嫌なものという先入観や生活に必要な収入を得るための手段に過ぎないという考え方がある。しかし、人間は、職業を通じて、社会の一員としての役割を果たし、他の人々と結び付き、自己実現を図るということは、今も昔も変わらない。そこで、フリーターの持つ問題点を教員が教えるのではなく、生徒が相互に自らの意見を述べ合うことにより発見させたい。また、自己の主張を裏付けるための新聞・書籍などからの情報収集を通して、進路情報の収集・分析・活用能力の育成を図りたい。

(2) 単元の内容

第1時 ディベートの方法を理解し、学習目標に基づく論題「若い世代に増加するフリーター」を決める。

第2時 ディベートの役割分担を決めるとともに、資料収集・分析の方法を理解する。

第3時 グループ毎に話し合い、フリーターに関する資料の収集を行う。

第4時 収集した資料を分析し、草稿の執筆を行う。

第5時 「若い世代に増加するフリーター」を論題に、ディベートを行う。【本時】

第6時 ディベート授業の感想を話し合い、フリーターに関して、自由に意見交換する。

第7時 前時までの授業を踏まえて、職業の意義や役割、職業を通じた自己実現について考える。

(3) 単元のねらい

- ① フリーターについて、様々な情報を収集し、フリーターの現状と意識を理解する。
- ② フリーターについて、情報を分析し、ディベートの論点を的確に把握する。
- ③ 職業観・勤労観の未成熟など、フリーターの持つ問題点について考える。
- ④ 職業を通じた自己実現について、主体的に考える。

(4) 本時

① 本時のねらい

- ア フリーターについての賛成意見・反対意見を踏まえ、フリーターの意識を考える。
- イ 職業の意義や役割を主体的に考える。
- ウ 他者の意見を主体的に受け止め、意欲的に自己の考えを発言するとともに、積極的に議論を聞く態度を育成する。

② 授業展開 (50分)

- ア 役割分担 司会 1名 時計係 4名 (各派2名ずつ)
審判 2名 賛成派論者・反対派論者 それぞれ6名
- イ 競技時間 40分
- ウ 論 題 「若い世代に増加するフリーター」



(授業については、展開のみ掲載する。)

時 間		学習の進め方	生徒の主な意見
	6分	フリーター賛成派立論	①自分の夢に向かって突き進むためのフリーターは悪いことではない。 ②自分の本当にやりたいことを実現するためには自由な時間がほしい。

展	36分	6分	フリーター反対派立論	①フリーターは立場が不安定で生活が安定しない。 ②従来のアルバイトと今のアルバイトは考え方が違って、今は安易に考える傾向にある。
		2分	質疑応答 反対派→賛成派	①フリーターはだれでも夢を追いかけていると思っているのか。
		2分	質疑応答 賛成派→反対派	①フリーターは全て、生活が不安定と考えているのか。
		2分	作戦タイム	
開	36分	5分	反対派反対尋問	①全てのフリーターが、夢を追いかけているわけではない。 ②自分が好きなことをやって生活することは楽しいが、働く辛さや苦勞を味わって人間は成長する。
		5分	賛成派反対尋問	①人生は一度しかない。自分が納得できる道に進むほうが幸せである。 ②月に20万円以上も稼いで、生活が十分に安定しているフリーターもいる。
		2分	作戦タイム	
		3分	フリーター反対派最終弁論	①自分の進路をじっくりと考え、本当に自分に合った職業を見つけることが大切である。
		3分	フリーター賛成派最終弁論	①自分のやりたいことをとことん追求してから定職に就いても遅くはない。

③ 評価の観点

ア 職業観・労働観の確立、職業を通じた自己実現という観点から、フリーターの意識を考えることができたか。

イ 相手の主張を的確に理解し、自己の考えを適切に表現することができたか。

ウ 賛成意見・反対意見を客観的に判断し、フリーターについて自己の見方や考え方を持つことができたか。

④ 生徒の感想

ア ディベート授業を経験してどのような感想を持ったか。

(ア)楽しかった 30人 (イ)つまらなかった 2人 (ウ)どちらでもない 5人

イ フリーターに関して、ディベートの前と後ではどのような印象を持ったか。

(ア)以前と考え方が変わった 11人 (イ)以前とさほど変わらない 26人

ウ 今後、自分の進路について、じっくり考えようと思うか。

(ア)はい 33人 (イ)いいえ 0人 (ウ)分からない 4人

エ 感想文

- (ア)おもしろかった。初めはフリーター賛成派だったけれど、反対派の意見を聞いて納得できる点もたくさんあった。(イ)論者の人がよく調べてあり、ためになった。
- (ウ)両方の話を聞いていて楽しかった。自分の進路に対して真剣に取り組もうと思った。(エ)フリーターのいい点も悪い点も分かったので良かった。(オ)自分が人前でこんなに話せるとは思わなかった。自信がついた。

6 まとめと今後の課題

今回の研究においては、総合的な学習の時間において、「進路学習」をテーマとして取り上げ、高等学校3年間を通して、生徒が自己の在り方生き方を考え、職業観や勤労観の確立を図る学習を目指した。こうした学習を通して、生徒が将来に向けて、進んで自己を生かそうとする意欲や態度を培い、人間が生きていく上での職業や勤労の果たす意義や役割について認識を深めることができるものと考えた。また、自己や職業についての学習は、自己と社会とのかかわりを意識させ、社会や経済など、幅広い視野で学習することを促し、社会を構成する一員としての責任を自覚させるものと思う。

一方、総合的な学習の時間は新たに設けられた学習活動であり、今回の研究で作成した年間指導計画の実施に当たっては、様々な課題も考えられる。

総合的な学習の時間における「進路学習」と従来から行われている「進路指導」をどのように有機的に結び付けるかということがある。進路に関する指導は、卒業時の進学指導や就職指導ではなく、生徒の在り方生き方についての指導である。特定の学年や教科等での指導ではなく、学校全体で指導体制を確立し、全ての学年、全ての教科等を通して、組織的・計画的に行う必要がある。そのためには、総合的な学習の時間における「進路学習」を各学校の進路指導の全体計画の中に位置付けることが重要であり、特に、今回作成した年間指導計画は各学校の進路指導計画と調整する必要もある。

また、高等学校では、教科の専門性を重視した指導が行われるため、横断的・総合的な学習の指導の経験が少ないと思われる。「進路学習」の指導に当たっては、必ずしも各教員の専門性を踏まえた指導内容とならないこともある。各教員が自分の専門教科に固執するのではなく、専門性を生かしながら、横断的・総合的な学習の指導ができるよう、今まで以上に、校内におけるコミュニケーションを図っていく必要がある。

さらに、講演会、体験的な学習、課題調査等を実施するに当たっては、講演会の講師、見学や就業体験の可能な企業等、ボランティア活動等の受け入れ可能な施設などを新たに開拓することも必要である。そのためには、保護者や地域社会の人々に総合的な学習の時間の意義を積極的に伝えていくなど、家庭や地域社会とともに生徒を育成していくという視点が重要である。

「進路学習」の実施に当たっては、様々な実践上の課題もあると思われるが、全ての生徒が将来に向けて、豊かな自己実現を達成し、真に豊かな生活を送れるよう、課題解決に努力したい。

Ⅲ 国際理解（第2分科会）

1 研究の趣旨

交通手段の発達や情報化が進む中、経済、社会、文化等の様々な分野で国際交流が進展し、国際的な相互依存関係がますます深まっている。特に、世界的規模での情報通信のネットワーク化の進展は、国際化の進展を一層促進し、他国をますます身近なものにさせるようになっている。こうした国際化の急速な進展の中で、絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに、国家を越えて相互に理解し合うことは、ますます重要な課題となっている。

国際化の進展は、人と人との相互理解・相互交流が基本となるもので、その意味で、学校教育の果たす役割は重要であり、これからの学校においては、生徒に対して、広い視野を持つとともに、異文化に対する理解や異文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度を育成することが一層求められる。また、国際理解の学習は、既にこれまでも、各学校において、各教科・特別活動において様々な取り組みが行われてきているが、明確な指導理念に基づく、横断的・総合的な取り組みが行われてきたとは言い難いところもある。

そこで、本研究では、総合的な学習の時間において国際理解を取り上げ、教科等における学習との関連を図りながら、自国の文化についての理解を深めるとともに、広い視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共生できる資質・能力の育成を目指して、年間指導計画、実践事例を作成することとした。

2 年間指導計画の例

これからの国際社会において、異文化を持った人々と共生できる資質・能力を育成していくためには、相互の多元的な価値観や歴史的伝統を理解し、相互に尊重し合う態度を育成することが重要である。そこで年間指導計画の作成にあたって、第1学年では、他者（他国）の持つ文化や価値観などの理解、第2学年では、自己（自国）の持つ文化や価値観などの理解、第3学年では、自己（自国）と他者（他国）の違いを受容できる態度の育成をねらいとした。その際、国際理解が単に知識理解にとどまることなく、実践的な態度や能力の育成にまで高められるよう、体験的な学習や課題学習などを工夫することとした。

(1) 第1学年の年間指導計画の例

第1学年の生徒の実態をみると、国際化という言葉への関心はあるものの、外国の文化や生活、習慣、価値観などについての興味・関心は必ずしも高いとは言えない。国際理解の学習を進めるにあたっては、外国の生活や文化などを理解し、その違いを受容する態度の育成が極めて大切である。そこで、第1学年の年間指導計画のねらいを「外国の文化や生活、人々の物の考え方について興味・関心を高めさせながら理解を促す」とした。第1学期は、外国人講師による講演会や参加学習型アクティビティーなどを工夫して、外国の文化や生活、人々の物の考え方などについて興味・関心を高めさせることをねらいとした。第2・3学期は、生徒の興味・関心のある世界の地域を調査させ、日本の文化や生活との違いを理解させることとした。なお、生徒が途中で学習意欲を失うことのないよう、毎時間の授業の最後に、自己評価や授業についての感想を書かせ（ポートフォリオ形式）、教

員による適切な指導・助言を行うこととした。

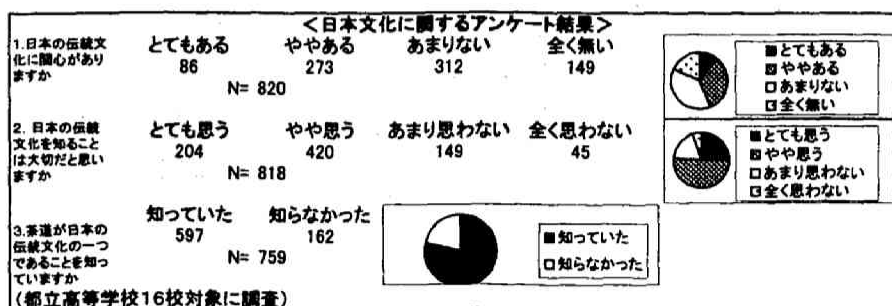
学期	学習内容・活動	時数	指導上の留意点
1 学 期	①オリエンテーション ②外国人講師による講演 日本と外国の文化や生活などの違いを理解する。 ③〔参加型学習〕四隅の部屋 ④〔参加型学習〕ブレインストーミング ⑤〔参加型学習〕フォトランゲージ ⑥〔参加型学習〕貿易ゲーム ⑦〔参加型学習〕シミュレーション ⑧〔参加型学習〕ロールプレイング ⑨〔参加型学習〕非識字ゲーム	1 2	①外国の文化や人々の物の考え方などを理解する意義を十分に説明する。 ②1年間の学習に対する動機付けとなるようにする。 ③～⑨参加学習型アクティビティーにおいては、自己（自国）と他者（他国）との違いなどを体験し、他者（他国）の立場になって考えることができるよう、教材内容、教具の準備をする。
2 学 期	〈国際交流会〉 ⑩国際交流の準備 自分の身近にある衣・食・住、芸術など現代の日本の文化や生活について調べる。 ⑪外国人講師、留学生などとの交流会 3～5グループに分かれ、外国人講師や留学生の出身国の説明を聞いたり、現代の日本の文化や生活などについて紹介したりする。 〈調査学習〉 ⑫調査学習の準備 学習計画等を作成する。 ⑬インターネット講習会 調査学習に向けて、情報の収集方法を理解する。 ⑭世界の各地域についての調査学習 興味・関心のある世界の地域について、政治や経済、人々の生活や文化などを調べる。	1 5	⑩外国人講師や留学生（アジア、アフリカ、南北アメリカ等）の人数は、各クラスに3～5人とする。また、講師や留学生の出身国、予定されているパフォーマンスの内容は9月初旬の早い時期に知らせ、準備し易いようにする。 ⑬ホームページ検索の方法、メールの作成、送信方法やネチケツトなどについても講習する。 ⑭アクティビティーや交流会で分かった自己（自国）と他者（他国）の違いや疑問に基づき、班を編成させる。生徒が調べたい課題を自由に設定できるよう、国別とはせず、アジア班、アフリカ班、ヨーロッパ班、オセアニア班、南北アメリカ班などの地域別に分ける。
	〈調査学習の発表会〉 ⑮調査学習の発表に向けてのプレゼンテーションの講習 調査学習の発表に向けて、パワーポイント等の使用方法について理解する。		⑮ソフトの使用方法だけでなく、他の班の調査内容についての評価方法や、自己評価方法等も説明する。

3 学 期	⑯班別プレゼンテーション クラス内で、班毎に、世界の各地域についての調査内容を発表する。	8	⑯クラス内の評価の高い班をプレゼン大賞(発表会)に選出する。
	⑰プレゼン大賞(発表会) クラス対抗で、各クラス一つの班が発表する。参加者全員が発表内容について考え、評価し、大賞を決める。 (1年間の学習のまとめ)		⑰発表についての評価の観点、総合評価を記した評価票を配布する。
	⑱自己評価・授業感想ファイルの整理 ファイルの書き足りない箇所や、書いていない箇所を補足するとともに、1年間の自己評価、2年生での学習の展望を書き提出する。		⑱ファイルの整理を通して、これからの国際社会でどのように生きていこうかを考えさせる。

(2) 第2学年の年間指導計画の例

国際理解の学習を進めていくにあたっては、自己(自国)がどのようなものであるかを知ること、すなわち自己(自国)の座標軸を明確に持つことが極めて重要である。このことなくして、他者(他国)からも理解されず、他者(他国)を理解することもできない。そのためには、我が国の歴史や伝統文化などについての理解を深めさせることが必要である。先人達によって、どのような文化が創造され、現代の社会に継承され、我々の生活をどのように豊かなものになっているかということについて理解を深めることが大切である。そこで、第2学年では、日本の伝統文化について理解を図ることをねらいとして、年間指導計画を作成することとした。

年間指導計画を作成するに当たって、日本文化についての生徒の関心度をアンケート調査した。調査結果では、「日本の伝統文化に関心がありますか」という質問に対して、調査対象生徒の約44%が「とてもある」「ややある」と答えたものの、約56%が「あまりない」「全くない」と答えた。また、「日本の伝統文化を知ることが大切だと思いますか」という質問に対して、約76%が「とても思う」「やや思う」と答え、約24%が「あまり思わない」「全く思わない」と答えた。



調査結果を通して、多くの生徒は、日本の伝統文化を知ることが大切だと思っているが、余り関心はないということが伺える。学習の必要性は感じているが、興味・関心が湧かないという実態がある。そこで、年間指導計画の作成にあたっては、生徒の興味・関心を喚起することをねらいとした。第1学期は、生徒が身近な日常生活の中で「お茶」に親しんでいること、また、アンケート調査の結果より、多くの生徒が「茶道が日本の伝統文化の一つであること」を知っていることに着目し、学習の導入として、茶道の体験学習を工夫することとした。また、第2学期の日本の伝統文化についての調査学習では、日本の伝統的な文化について多くの素材を提示し、生徒が自己の興味・関心に基づき課題テーマを設定し易くするようにするとともに、資料館の見学等の体験的な学習も工夫した。さらに、第3学期の調査学習の発表会では、外国人留学生との交流会を企画することとした。

学期	学習内容・活動	時数	指導上の留意点
1 学 期	<p><茶道体験を通じた、自己の課題テーマの発見></p> <p>①オリエンテーション</p> <p>②茶道について知る。 本、ビデオ、スライド等を活用し、茶道への興味・関心を高める。</p> <p>③茶道を体験する。 先ず、自由に抹茶を飲む。次に、作法に基づき抹茶を飲み、その違いについての感想を交換する。</p> <p>④茶道体験を踏まえて、日本の伝統文化に関する課題テーマを選択する。 衣・食・住、スポーツ、遊び、芸能、年中行事などの幅広い素材から、自由に選択する。</p> <p>⑤課題テーマ別にグループに分かれ、調査学習の準備をする。</p>	12	<p>①日本の伝統文化を理解する意義や重要性について説明する。</p> <p>②茶道体験への動機付けとなるようにし、茶道についての説明は深入りしない。</p> <p>③茶道に親しませるため、和やかに楽しく行われるよう雰囲気づくりを心掛ける。</p> <p>④自己の興味・関心に基づき、主体的に課題を選択できるように、生徒の身近にある素材をできるだけ多く例示する。</p> <p>⑤調査学習の準備期間に、様々な調査方法（コンピュータを活用した情報検索方法等）を提示する。</p>
2 学	<p><課題調査とグループ発表></p> <p>⑥グループ毎に日本の伝統文化に関する調査を行う。</p> <p>⑦グループ内で発表する。 グループの生徒全員が発表し、調査内容、発表方法等について意見を述べる。</p> <p>⑧グループ間で発表する。 各グループのテーマに基づき、グループ毎に発表内容をまとめ、発表す</p>	15	<p>⑥課題調査は、外国文化との比較を視野に入れたものとする。</p> <p>⑦生徒が人前で発表することに対する苦手意識を取り除けるよう、少人数によるものとする。</p> <p>⑧パワーポイント等も活用し、生徒の表現力の向上を工夫する。また、各グループには、調査結果をクラ</p>

期	る。 ⑨冊子の作成とまとめを行う。 グループ間発表の内容をまとめる。		ス内の他のグループの生徒に分かりやすく説明させ、クラス全体で個々の調査内容を共有し合う場とする。 ⑨3学期の国際交流に活用できるものとする。
3 学 期	<国際交流を通じた異文化理解> ⑩国際交流会開催に向けて、グループに分かれる。 留学生等に日本の伝統文化を紹介するグループ、留学生の出身国について調べるグループ等に分かれる。 ⑪グループ毎に交流会で紹介する内容等について調べる。 2学期に学習した日本の伝統文化(茶道、着付、食文化等)を更に詳しく調べたり、留学生の出身国の文化を調べたりする。 ⑫国際交流会開催に向けての企画・準備を行う。 ⑬国際交流会を実施する。 ⑭1年間のまとめを行う。	8	⑩国際理解教育振興フォーラム等の外国人留学生の斡旋団体からのパンフレット等を提示する。日本文化については、外国の人に紹介したいものを取り上げる。 ⑪各グループ間での意見交換、外国文化に関する質問もリストアップさせる。 ⑫英語によるプレゼンテーションの練習も行わせ、表現力の向上を工夫する。

(3) 第3学年の年間指導計画について

第1・2学年の学習を踏まえ、第3学年の年間指導計画のねらい、学習の重点を想定した。第3学年では、「他者(他国)と自己(自国)の違いを認識し、違いを受容できる態度・能力の育成」を年間指導計画のねらいとし、年間1単位(35単位時間)で実施する。また、個人やグループで課題を調査したり、発表したりする学習を工夫する。

① 年間指導計画のねらい

国際理解の学習を進めていくにあたって、特に、重要であると考えられることは、多様な文化の生活・習慣・価値観などについて、「どちらが正しく、どちらが誤っている」ということでなく、他者(他国)と自己(自国)との違いを認識し、受容し、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度・能力を育成していくことである。国際的な依存関係がますます深まり、国際的な協調が必要とされる時代に生きる生徒にとって、こうした態度・能力の育成が強く求められる。第3学年では、他者(他国)と自己(自国)のかかわりの中で、違いを受容できる実践的な態度や能力の育成をねらいとする。

② 学習の重点

私たちには、自分とは異なるものを理解できないものとして片づけてしまうことがよ

くある。例えば、「最近の若者の考えていることは、全然分からない」ということがよく聞かれる。これは、自己の考え方や価値観を相対化せず、普遍化・絶対化し、他者の考え方や価値観を判断するためである。自己（自国）の考え方や価値観に捉われて、異文化の生活・習慣・価値観などを断定的に評価することは、異文化に対する偏見や誤った理解に陥らせることになる。そこで、第3学年では、自己（自国）の生活が多くの他者（他国）とかかわり支えられていること、また、自己（自国）の文化や物の考え方が、世界の様々な文化や物の考え方の一つであることを理解することを学習の重点とする。

ア 国際的な相互依存関係についての理解（第1学期）

身近な生活の中にある衣料品・食料品・電化製品などが、世界各国から供給され、世界の多くの人々の労働に依存していること、また、地球環境問題・エネルギー問題・人口問題などの解決にあたっては、国際的な協調が不可欠であることを理解する。学習にあたっては、グループごとに身近な輸入製品などを調査し、発表する。また、地球規模の問題については、生徒が自由に具体的なテーマを選択し、調査・発表する。

イ 自己（自国）の文化が世界の様々な文化の一つであることへの理解（第2・3学期）

世界の各地域の衣食住などの生活様式・宗教などを通して、世界には様々な文化や物の考え方があること、また、その背後には地形や気候、歴史的伝統などの風土の違いがあることについて理解し、自己（自国）の文化を相対化して捉えられるようにする。学習にあたっては、生徒が自由に世界の各地域を選択し、インターネット等も活用して、情報を入手し、調査する。また、第2学年での日本の伝統文化についての学習を踏まえ、その違いについて発表する。

3 第1学年第1学期における授業展開の事例

第1学期は、外国の文化や生活、人々の物の考え方、また、日本で生活する外国人の状況などについて知り、自己（自国）と他者（他国）の違いについて理解することをねらいとした。授業にあたっては、外国人講師による講演、参加学習型アクティビティーを工夫し、興味・関心を高めながら理解を深めることとした。

(1) 単元設定の理由

参加学習型アクティビティーを通して、環境問題、貿易問題など国際社会の課題についての疑似体験、また、非識字体験などをさせ、世界には日本とは異なった様々な考え方があることや日本で生活する外国人と自分の置かれている状況の違いを考えさせた。また、総合的な学習の時間は、現実の社会で主体的に生きていく人間の育成をねらいとしており、生徒はホームルーム集団の中で自己とは違った物の考え方や価値観を持った友人を知ることにより、集団の中で自己を認識し、主体的な生き方を自覚していく。参加学習型アクティビティーの様々な活動を通して、友人の異なる考え方や価値観を知る中で、生徒が主体的な生き方を確立していくことを目指したい。

(2) 単元のねらい

ア 参加学習型アクティビティーに意欲的に取り組み、他者（他国）の文化や生活、物の考え方などについて興味・関心を持つ。

イ 自己（自国）と他者（他国）の文化や生活、物の考え方の違いなどについて理解を深める。

(3) 単元の内容

第1時 生徒の身近にある事項について、いくつかの質問をし、質問に対する回答の違いによって、質問毎に部屋の四隅に分かれる。そのことを通して、自分と友人の考え方には違いと共通性があることに気づき、相互に尊重し合うことについて考える。

（四隅の部屋ゲーム）

第2時 ある事項について、思いついたことを皆で話し合い、そこから何かを見つけ出す。例えば、ある国の文化や生活などについて、イメージしていることを自由に出し合い、日本と外国の文化や生活などの違いを知る。イメージする国は、生徒が自由に選択する。（ブレインストーミングゲーム）

第3時 ある国・地域の様子を写した写真について、自由に意見を出し合い、物事には、人間によって多様な捉え方があるということを知り、自己の偏見や固定観念に気づく。（フォトランゲージゲーム）

第4時 ある国の立場に立って、貿易取引を疑似体験し、自由貿易、南北問題等について先進国、途上国などで考え方の違いがあることを知り、国際貿易の課題について考える。（貿易ゲーム）

第5時 ある事象をモデル化、単純化して、様々な立場に立って疑似体験する。例えば、開発推進派、環境保全派など、様々な立場で自然開発について疑似体験し、環境保全と開発について、立場の違いによる考え方の違いを知る。自然開発の具体的なテーマは生徒が自由に選択する。（シミュレーションゲーム）

第6時 国際社会が抱える課題について、対立する二つの立場に立って議論し、先進国と途上国などの考え方の違いを知る。国際社会の課題については、生徒が自由にテーマを選択する。（ロールプレイング）

第7時 生徒の読めない外国の文字で書かれた地図を提示し、目的地までの移動を考えさせる。そのことを通して、文字を読めない人の不安感や生活の困難さを疑似体験し、自分と日本で生活している外国人の置かれている状況の違いを理解する。（非識字体験ゲーム）【本時】

(4) 本時

① 本時のねらい

ア 日本で生活している外国人が日本語を十分読めないため不安感を持ち、日常生活で様々な困難を抱えていることを理解する。

イ 日本で生活している外国人と自分の日常生活における状況の違いに気づき、相手の立場を考え、共に生きていくことの大切さを理解し、人権意識を高める。

ウ 非識字体験ゲームに、意欲的に取り組む。

② 授業展開（50分）

時間	学習活動・内容	指導上の留意点
	○ 日本で生活する外国人が、日本語を読めないため不	○ 授業のねらいを理解さ

5分	<p>安感を持って生活していることを理解する。</p> <p>○ 世界の識字率を知り、世界には、多数の非識字者がいることを理解する。どのような国々に多いか考える。</p> <p>○ 世界の非識字者がどのような生活をしているか考える。</p>	<p>せる。</p> <p>○ 識字率についての統計資料等を調べさせる。</p>
30分	<p>○ 非識字体験ゲームを通して、文字を読めないことへの不安感や生活の困難さを疑似体験する。</p> <p>① 3～5人ずつのグループに分かれる。</p> <p>② 韓国語・朝鮮語で書かれた大阪地下鉄路線図を見て、次のことについて考える。</p> <p>ア 現在、千林大宮駅にいる。目的地の天王寺駅は地図上のどこにあるか。また、目的地に行くには、どこの駅で乗り換え、何線に乗るのか。</p> <p>イ 目的地までの料金はいくらかかるか。</p> <p>③ 各グループ毎に結果を発表する。</p> <p>④ 韓国語・朝鮮語で書かれた駅名についての説明を聞き、正解を知る。</p>	<p>○ 全員で話し合えるよう、少人数のグループにする。</p> <p>○ 東京の地下鉄路線図は、文字が読めなくても想像がつくため、東京以外の路線図を使用する。</p> <p>○ ゲームではなく、実際に直面したら、どのような気持ちになるか発表させる。</p>
15分	<p>○ 日本の識字率は、統計資料では100%となっているが、文字の読めない人がいることを知る。</p> <p>○ 「あるおかあちゃんの話」を読み、文字を読めないために受けた心の痛みや生活の困難さを理解する。</p> <p>○ 授業の感想を書く。</p>	<p>○ 文字を読めないために受けた心の痛みを共感的に理解し、相手の立場に立って考えるなどの人権意識を持たせる。</p>

③ 評価の観点

ア 非識字体験ゲームにおいて、自分の考えを積極的に発言できたか。

イ 非識字体験ゲームを通して、日本で生活している外国人の気持ちを実感することができたか。

ウ 「あるおかあちゃんの話」を通して、文字を読めない人の心の痛みを共感的に理解するとともに、相手の立場に立って考えることの大切さを理解することができたか。

④ 授業での使用資料

ア 「あるおかあちゃんの話」

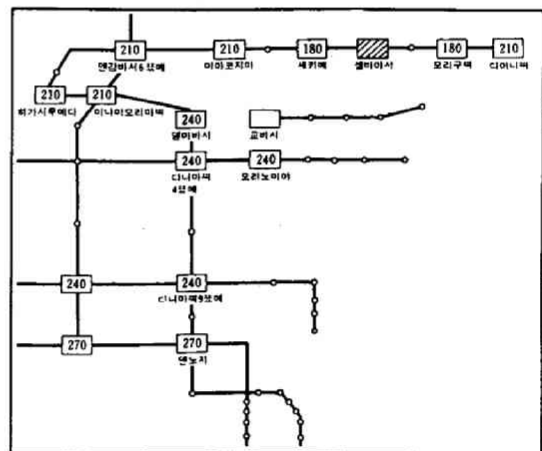
(「新しい開発教育のすすめ方 (改訂新版)

—地球市民を育てる現場から— 開発教育推進セミナー編 古今書院 P.92 より引用)

イ 大阪地下鉄路線図 (右図)

(「新しい開発教育のすすめ方 (改訂新版)

—地球市民を育てる現場から— 開発教育推進セミナー編 古今書院 P.90 より抜粋)



⑤ 生徒の感想

ア 自国の文字を読めない人々が何億人もいることを知り、その人々が自分たち以上に困っていることが分かった。イ 行きたい場所へ、勘や景色を見て行かなければならないほど不安な気持ちはないと思う。ウ 文字が読めないために、命も危険になることを知り、本当に辛い思いをいただろうなと思った。

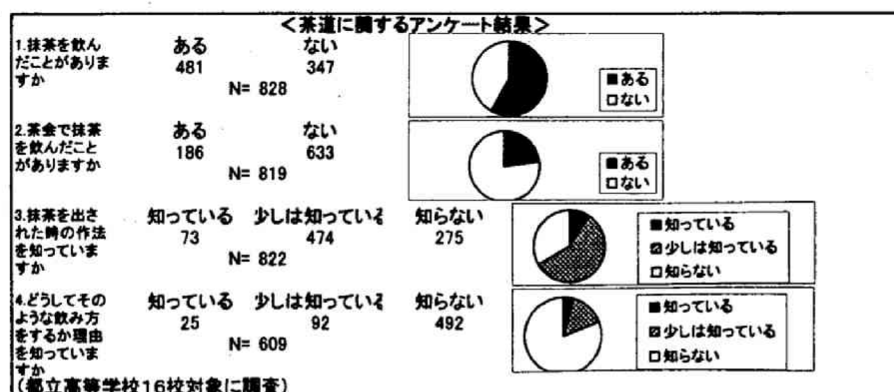
4 第2学年第1学期における授業展開の事例

第1学期は、茶道体験を通して、日本の伝統文化についての興味・関心を高めるとともに、日本で生活していながら、日本の伝統文化については、余り知らないということに気づき、一人一人の生徒が日本の伝統文化についての調査学習の課題テーマを主体的に選択することをねらいとする。

(1) 単元設定の理由

茶道体験の学習を実施するに当たって、茶道体験についてのアンケート調査を実施した。調査結果では、「抹茶を飲んだことがありますか」という質問に対して、調査対象生徒の約58%が「ある」と答えた。「茶会で客として抹茶を飲んだことがありますか」については、「ある」と答えた生徒が約23%しか、「(抹茶を出された時) どうしてそのような飲み方をするか理由を知っていますか」については、「知っている」「少しは知っている」と答えた生徒が約19%しかいなかった。茶道の具体的な内容については、多くの生徒が理解していない状況が伺える。

また、茶道の考え方は、書道、華道、建築、香道、着物などの日本の伝統文化に共通する内容も多く、他の日本の伝統文化の学習の動機付けにしたい。また、抹茶を飲み、菓子を食べることにより、生徒の味覚に訴え、生徒の関心を高めさせたい。



(2) 単元の内容

- 第1時 外国の人が日本(人)に対して抱く疑問に答える。
- 第2時 食物、衣服、生活様式、芸術等の分野ごとに日本的なものを見直す。
- 第3・4時 視聴覚教材を通して、日本の伝統文化に触れる。
- 第5・6時 茶道体験を行う。【本時】
- 第7時 色々な国・地域風の飲食を試みる。
- 第8時 視聴覚教材を通して、外国の文化に触れる。

(3) 単元のねらい

- ① 世界には、国や地域独特の様々な飲食の風習があることを知る。
- ② 茶道体験を通して、日本の伝統文化についての関心を高める。
- ③ 茶道などの日本の伝統文化には、共通した考え方があることを知る。

(4) 本時 (100分)

① 本時のねらい

- ア 抹茶を飲むことを通して、茶道への関心を高める。
- イ 抹茶の飲み方など、茶道の作法にはどんな特徴があるか考える。
- ウ 点前の動作の一つ一つに、精神的な意味があることに気づく。

② 事前準備

- ア 点前のできる茶道部員等（いなければ、教員、保護者、地域の指導者の協力を得る）に点前の準備を依頼する。
- イ 茶室があれば、床に掛け軸・花・香合を飾り、風炉に香をたく。
(なお、茶室がない場合は、地域の文化施設を利用する。流派にはとらわれず、指導するものの流派でよい。)

③ 授業展開 (100分)

時間	学習項目	学習活動等
10分	席入り 授業内容説明	自由に座る。
15分	点前拝見 (1回目)	点前を見るが、特に説明は聞かない。生徒には後で感想を述べてもらうことを伝えておく。
10分	お茶を頂く (次客以降は点出しでもよい)	茶・菓子の頂き方は作法通りとせず、各自が飲み方を考え、自由に飲む。
15分	フリーディスカッション (1)	お茶を飲んだり、点前を見た感想を自由に述べる。
15分	点前拝見 (2回目) 点前の解説を聞く	袱紗さばき (棗・茶杓の清め)、茶筌通し (茶筌の先を調べ、茶碗を温め、洗う) など、点前の説明を聞く。
10分	お茶を頂く	客として基本的な作法の説明を聞き、お茶を飲む。
20分	フリーディスカッション (2)	作法を踏まえて飲んだ感想、茶室内で感じたこと、日本文化に対して思うことなどについて、意見交換する。
5分	まとめ	茶道体験を通して、日本の伝統文化についての自分の知識を確認し、知識を更に深めるために必要なことを考える。

④ 評価の観点

- ア 主体的、意欲的に茶道の体験活動ができたか。
- イ フリーディスカッション等を通して、茶道の作法のもつ意味について積極的に考えることができたか。

⑤ 生徒の感想

ア 全く説明なしにお茶を飲み、点前を見た感想

(7)「お菓子をどうぞ」と言われたが、食べるタイミングが分からない。お茶が出るまで待っていてはいけないのか。(イ)全員のお茶が出ていないのに先に飲んでいいのか、待つべきなのか分からなかった。飲み方がわからない。(ロ)お茶が美味しい。お茶が泡立っていた。(ハ) (亭主・半東の動きを見て) お辞儀が多い。足の動きが慎重だった。いつもの歩き方と違う。作法が面倒くさそう。色々なものをふきまわっていた。最初お湯を入れたのに捨てたのは何故か。無駄な動きが多い。(ニ)しびれた。正座じゃないといけないのか。

イ 説明をされながらお茶を飲み、点前を見た感想

(7) 教わったように飲むのは大変だけど、日本の文化を感じるのだから良い。(イ)お菓子を先に食べると説明を受けたけど、やっぱりお茶と同時に食べたい。(ロ)お茶を飲むとき、最後に音をたてるのは恥ずかしくて出来なかった。残さず飲み干したほうがいいのか。(ハ)謙虚さを示すために茶碗の正面を避けて



飲むというのは気を遣いすぎているとも思うが、その謙虚さが日本の伝統みたいでかっこいい。(ニ)解説があったので、何でああいう動きをしてお茶を点ているのか、意味が分かった。動きの意味は分かったけど、格式ばってる気がする。(ホ)左利きだが、あまり左手を使ってはいけないのか。(ヘ)お茶を入れるための道具がたくさんあると思った。(ロ)茶室に入った時、木の甘いにおいがした。

ウ 海外にはないと思われる「日本文化特有なもの」への気づき

「畳」「障子」「ふすま」「(点出しの生徒が着ていた)袴」「(床の間をさして)神棚」

5 生徒の主体的な学習を促すための留意点

総合的な学習の時間では、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考える力」を育成することなどをねらいとしている。このような力を育成するためには、生徒の興味・関心を引き出し、学習意欲を高め、一人一人の生徒が主体性を持って学習に取り組むことができるようにすることが大切である。そこで、本研究では、次の点に留意した。

(1) 信頼感と安心感のある学習集団づくり

学習活動の中で、他者に対して受け身であっては、生徒の主体性は育たない。教師と生徒の人間関係や生徒間の人間関係を信頼感や安心感のあるものにしてはじめて、教師やクラスメートに対して主体性を持って係わるようになり、主体的な学習活動が展開できる。そこで、特に、第1学年の第1学期は、入学早々でもあり、クラス内の人間関係も希薄であるため、参加学習型アクティビティー（7時間）を工夫し、生徒同士が同じ体験を持つことにより、友人の物の見方や考え方を知り、互いがどういう人間なのかを理解し、人間的な絆を深められるようにした。

(2) 生徒自らが学習計画を作成

学習を進めるに当たっては、生徒の学習の進度が異なり、学習に遅れがちな生徒も出て来ることが予想される。そこで、課題調査については、学習計画の作成を生徒に行わせることとし、そのための時間を調査学習の準備として、年間指導計画に位置づけた。生徒は自分で学習計画を作成することにより、学習に見通しを持つことができ、安心感を持つとともに、自分で作成した学習計画ということから、学習に対する責任感や主体性を持つようになることが期待できる。なお、学習計画については、学習の場面や段階に応じて具体的に指導・助言することとした。

(3) 学習への支援としての評価

生徒が1年間の学習に積極的に取り組むためには、継続した意欲の喚起が必要である。そのためには、結果の評価ではなく学習のプロセスに着目した、「学習への支援としての評価」が大切である。そこで、評価に当たって、次の工夫をすることとした。

ア 体験学習や調査学習のレポート、発表等についての評価に当たっては、必ず良かった点を見出し評価することとした。

イ 学習への意欲、関心、態度などについて自己評価シートを作成し、毎時間の授業の最後に記入させる。自己評価が、次の学習への動機付けになるよう、自己の良かった点を肯定的に評価させることとした。

ウ 生徒の学習活動の様子を毎時間記録に取り、ファイリングし（ポートフォリオ評価）、生徒の学習意欲等の変化を知ることとした。

エ 自己評価、学習活動の記録をもとに、計画的に生徒の成長を助言し、学習意欲を喚起するようにした。

6 まとめと今後の課題

今回の研究では、「他者（他国）を知り自己（自国）を知る。自己（自国）を知り他者（他国）を知る。」ということを研究員の合い言葉とした。これは、他者（他国）の文化や生活、価値観などを知ることにより、改めて、自己（自国）を見直すことができる、また、自己（自国）の文化や生活、価値観などを知ることにより、改めて、他者（他国）を見直すことができることを意味する。このことを通して、自己（自国）と他者（他国）の「違い」を受容し、「違い」を尊重できる生徒を育成できると考えたからである。

一方、異文化を持つ人々と相互に尊重し合うことは、世界の全ての人々に対して差別や偏見のない人間理解のできる生徒の育成であり、このことは各学校の人権教育の推進と密接に関連する。また、異文化や日本の伝統文化については、地理歴史科・公民科等の学習で詳しく扱う。さらに、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意見を表現し、相互理解を深めていくためには、表現力等のコミュニケーション能力の育成を図っていくことが必要である。調査学習の発表会・国際交流会等においては、プレゼンテーションの学習を年間指導計画に位置づけたが、外国語や国語等の学習との連携も必要である。年間指導計画に基づき、具体的に授業を実践するにあたっては、各教科や様々な教育活動との関連を図りながら、授業内容を工夫していく必要がある。